



# 「思い」を看っていた

【東京都】伏見 浩之 ふしみ ひろゆき  
56歳

2歳を迎えたばかりの娘が夜中に高熱を出した。1年前に肺炎で入院した経過があるので朝を待たず夜間当番医を探した。見付けたのは5年前に父を看取った総合病院だった。父の入院期間は7カ月ほどだったが、当時のことを思い出し少し重い気持ちになった。しかし、真つ赤な顔で苦しそうに息をする娘を見ると迷う余地はなく、電話で予約し妻と急いで身支度を整えると病院へと車を走らせた。

夜間通用口から入ると、そこに懐かしい顔が待っていた。父の入院当時に大変お世話になった看護師さんの1人だった。

「受付から名前を聞いて、もしやと思って待っていました。やっぱりあの時の息子さんですね」

「はい。あの節は大変お世話になりました。今日は娘が……」

お辞儀をしてあらためて顔をうかがうとその目に涙が浮かんでいたので驚いた。今は師長をされているその方は、別の看護師さんに妻と娘を診察室に案内するよう指示すると私を廊下に引き留めた。

「お父さんはね、あなたの結婚をずいぶん心配されてたんですよ。娘さんには申し訳ないけれどこうして会えてよかった。お父さんとの約束を果たせたようで安心しました」

そして当時、病室を訪れるたびに父が話していたという心配ごとの数々を話してくれた。まだ現役だった職場のこと、早くに妻が他界したため男手で育てた私や姉のことなど、家族にだからこそ言えなかった父の悩みを聞いていたとのことだった。

父が他界し病院を出る時、ほかの看護師さんたちがうつむく中、彼女だけ表情を変えず黙って見送る姿が印象的だったので、まさかそんなやり取りがあったとは思わなかった。父の思いまで看取っていたことに5年たつて気付かされた。

診察を終え安堵して戻った妻と娘を穏やかな笑顔で迎える姿にあらためて感謝し、この上ない安心感を持って病院を後にした。